

ボルネオのプナンの植物知識・認識と利用

京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科 小泉都

●植物知識・認識

プナンはボルネオの森林の狩猟採集民である（ただし、定住化が進んでいる）。プナンの植物知識についての研究を始めるにあたり、ある人類学者から「使ってもいない植物の名前をきいて何になる、実際の生活に即した研究をせよ」と助言をうけた。私はその助言を鵜呑みにはできなかった。

研究対象は、東カリマンタン州の山間の村ロング・ブラカ（人口約 160 人）のプナン・プナルイである。少数の大人と森林で植物採集を行いながらその知識を聞き取った（計 12 人、標本 1315 点、約 740 種）。また採集した標本を多数の村人に示しながらの聞き取りにより知識の変異を調査した（さく葉標本 124 点×40 人—約 10~60 歳・男女—、生の標本 33 点×31 人—約 17~60 歳・男女—など）。食事調査（20 軒×20 日）、よく利用する植物についての聞き取り（利用目的ごとに成人男性 1~3 人）、参与観察などにより植物利用も調査した。

この結果、ほとんどの植物に名前があり命名は客観的な性格が強いこと、約 77% の植物が有用性をもつとされること、実際によく利用される植物はそのうちの 3~4 割程度しかないこと、生態についても豊富な知識を持つことなどが分かった。また個人間の知識には変異があり、一人で森に行くようになって初めて植物をよく知るようになっていた。

これらのことから、私は基本的な知識と森の見方が伝達されたのちは個人の広く客観的な観察によって知識が習得されると考えている。種多様性の高い森林において植物を見分け、狩猟採集行動を支える森林の生態系を理解したり有用な植物を見いだしたりするためには、特定の植物だけを学ぶよりも広い観察を基本として知識を習得するほうが自然な態度なのかもしれない。

● 食事からみた利用

プナン・プナルイは、ボルネオ島・インドネシア領・東カリマンタン州に暮らしている。以前は森林で狩猟採集生活を営んできたが、1950 年代中頃から定住化が始まり、半定住状態を経て、現在ではほぼ完全に定住して焼畑稲作を行うようになっていく。ただし、各種生業への従事、分配に関する文化など、様々な側面で付近の農耕民とは異なっている。彼らの食事内容について、野生動植物の貢献度や食料の分配などに着目しながら報告する。

プナン・プナルイの村であるロング・ブラカ（人口約 160 人）において、2004 年の 9 月から 11 月にかけての計 20 日間、全戸 20 軒の家で食べたものとその由来を聞き取った（ただし、他村や焼畑出作り小屋に滞在中などは訊いていない）。346 日×軒で、1074 食について聞き取ることができた。以下、結果は利用回数ベースで示す。

主食は 1 日平均 3.1 回食べられており、その 96% を農作物が占めていた。米が全体の 60%、バナナが全体の 28% となっている。ただし、年間を通じて食べるのに十分な米を生産できておらず、調査期間が収穫期の前であったことから、全体の 60% が他村から購入した農作物（ほとんどが米）で占められていた。

副食は 1 日平均 2.4 回食べている（つまり、時々主食だけの食事があった；これは好んでそうしていたわけではなく、副食食材を調達できなかったから）。ほとんどの場合、1 つの副食は 1 つの食材（油や塩、味の素は除く）のみを使ったものである。副食のうちの 61% が動物性で、39% が植物性であった。

副食の動物性食材の 99.6% は、ロング・ブラカの村人が獲った野生動物であった。さらに、全体の 51% は分配によるものだった（その家の人が獲ったのではなく、別の村人が獲ったものが分配されたもの）。とくに、動物性食材の 58% はイノシシだったが、このイノシシの 67% は分

配によるものだった。これは、イノシシが獲れた場合（小さい場合は除くが）村の家族全体に分配する習慣があるためである。イノシシの次には、魚がよく利用されており動物性食材の31%を占めていた。

副食の植物性食材もほとんど村で自給したものだったが、68%が栽培植物だった。また、野生植物は開放地や村の近くの二次林でとれるものが多く、森林性ものは全体の9%しかなかった。

農耕は家族で行うし、主食となる野生のサゴデンプン採りも家族で行う。しかし、副食の野生動物の狩猟採集には男性の貢献度が大きく、女性は開放地のシダや川の魚や小動物など副食の野生動植物のうち6%を獲っていただけだった。